

寄稿

わが国への「リハビリテーション」導入の歴史 —河崎学園での歩みとともに—

大阪河崎リハビリテーション大学名誉教授

浅野 達 雄

昭和25年、当時のGHQから欧米の先進諸国の医療の視察が許されて日本に「リハビリテーション」の言葉と医療、教育を導入したのは、水野祥太郎、小池文英、土屋弘吉、服部一郎の諸先生方である。先生方はイングランドの病院で「昨日の敵は今日の友」として、リハビリテーション医療とは何か、システム、教育について指導を受けられた。イングランドの病院ではどこの病院や施設でも、リハビリテーションの専任医師が障がいへの後療法を担当する理学療法士、作業療法士に指示を出していた。日本にもこのような専門職の養成が急務であることを先生方は当時の厚生省に説明したが理解されなかった。また同様に、整形外科の医師たちにも養成校の必要性を説明するも同様に理解が困難であった。

しばらくの間養成校の開校規制が続いていたが、大阪でもようやく専門職の育成を目的に、昭和39年に府立盲学校、昭和45年に行岡リハビリテーション専門学校、昭和48年に国立療養所近畿中央病院附属リハビリテーション学院（現国立病院機構近畿胸部疾患医療センター）が開校した。しかし規制が残っていたため1学年の学生数は、おおよそ理学療法学科290名、作業療法学科260名、言語聴覚学科40名の少数であった。

国家試験については、昭和41年に第1回理学療法士国家試験が実施され、全国で183名が合格した。筆者もその合格者のうちの1名であったが、この数は総受験者の15%と厳しいものであった。都道府県別に合格者をみると、大阪府内では20名であったが、合格者がいない県が15県もあった。当時の国家試験は二次試験まであり、一次試験の筆記試験で60点以上の者だけが実技試験の二次試験に進むことができた。実技試験は難しく不合格者が多かったと聞いた。しかし水野祥太郎先生から「世界のレベルに近付くにはこれくらいの試練が必要である」と毅然とした態度で言われた事が、今でも脳裏に焼き付いている。それが平成20年の第43回理学療法士国家試験では、全国で6924名の合格者を輩出し、会員数は5万人以上となり、大きな職能団体に発展してきた。

このような歴史の中、平成7年10月、大阪河崎リハビリテーション大学（以下、本学とする）の前身である河崎医療技術専門学校設立準備室が設置され、筆者はその一員となった。平成9年3月、当時の厚生大臣より理学療法士及び作業療法士養成施設としての指定を受け、同年4月5日、第1回専門学校入学式が挙行された。9期生まで受け入れた河崎医療技術専門学校は、本学への改組に伴い平成20年3月31日閉校した。理学療法学科326名、作業療法学科290名の学生諸子が専門学校を巣立って行った。筆者は、副校長として微力ながら専門学校の発展のために寄与した。開校当初、カリキュラム作成や厚生省職員による検査のための準備に奔走し、特に実習地確保に苦慮したことを思い出す。

専門学校と並行して、平成15年10月には本学の設立準備室が設置された。平成17年12月、文部科学大臣より大学設置の許可を受け、翌年18年4月に本学が開学した。同年4月3日、第1回入学式が挙行され、その後、毎年入学生を迎え入れ、平成20年度中では、理学療法学専攻205名、作業療法学専攻160名、言語聴覚学専攻69名が在籍している。まさに、今この大学があるのは、諸先生方や多くの先人達が造ってこられたリハビリテーション医学の歴史と、先見の目を持って先頭に立ち助言くださった理事長、及び学園に寄与された教職員や卒業生の方々のお陰であることを、伝え残したい。

思い起こせば、私は日本のリハビリテーション医学及び理学療法士の歴史とともに歩んで来た。さらに河 学園においては、専門学校設立準備室の一員に着任して以来、学園の歴史とともに歩んで来た。多くの方々のご尽力とご協力により、理学療法の発展や学校の発展のための課題に取り組むことができ、また学生とともに多くのことを学ぶことができたことを誇りに思っている。平成20年3月末、一身上の都合により本学を退職したが、4月1日には、本学第一号となる名誉教授の称号を授与された。皆様方にはお世話になり、本当に有り難うございました。加えて本稿作成にあたり加筆協力をくださった理学療法学専攻の藤平保茂講師には深く感謝します。

最後になりましたが、大阪河崎リハビリテーション大学が、更なる発展向上をされますことをお祈り致します。